



暮らしを守るために



びわ湖の周りに人が住むようになり、川の氾濫は「災害」となりました。現在、滋賀県では、洪水から暮らしを守ったり、水を利用しやすくしたりするための工事や取組を、環境に配慮して行っています。あなたの住む地域の災害や防災の取組についても調べてみましょう。

■洪水の歴史 (3-8 洪水の歴史)

滋賀県は、川底が周りの地面よりも高い位置にある天井川が多く、昔から台風や大雨により、堤防の決壊や浸水など、多くの水害が発生しています。

また、びわ湖から流れ出る川は瀬田川一本だけであり、びわ湖は大雨が降り水位が上昇すると、元に戻るのに時間がかかることから、古くからびわ湖周辺では浸水被害に悩まされてきました。



びわ湖の大洪水 (1896年9月)

■グリーンインフラ (9-8 グリーンインフラ)

森林が土砂を食い止めたり、川岸の植物が水による浸水を防いだり、自然はたくさんの機能をもっています。このような自然がもつ力をインフラの整備に取り入れ、活用しようという考え方を「グリーンインフラ」といいます。グリーンインフラには、防災・減災だけでなく、生き物の生息地を提供したり、美しい自然の景観をつくるなど、環境保全や地域振興の効果もあります。

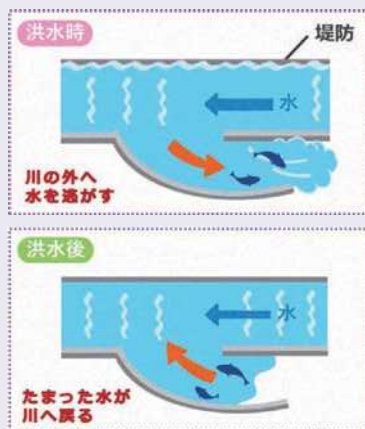
インフラ

道路やガス、水道、病院や公園などの公共施設など、私たちの生活を支える基盤のことを「インフラストラクチャー(インフラ)」と言う。

▶暮らしと自然を守る「霞堤」

日本の伝統的な治水工法のひとつに「霞堤」があります。想定を超える大雨などにより、川や水路の水の量が増えた時に、堤防の切れ目から田んぼ等へ水を逃がし、水の勢いを弱める効果があります。また、洪水がおさまってきたら溜った水が川へ戻る仕組みになっています。

霞堤の働きはこれだけではありません。洪水時には、川の生き物が堤防の切れ目から田んぼ等に一時的に避難し、洪水後にはまた元の川に戻るといような、生き物のすみかを提供し、川・田んぼ・里山のつながりを保つ、グリーンインフラとしての機能も持っています。



霞堤の仕組み



地域の産業を大切に



あなたが住んでいる地域には、どんなすてきな地域の資源がありますか？地域に住むみんなが発信して、地域資源の魅力をどんどん外へ広めていきましょう。

■1000年前から続く営み「琵琶湖システム」 (7-15 世界農業遺産「琵琶湖システム」)

びわ湖の環境や生き物を大切に思いながら、1000年以上前から受けつがれてきた農林水産業や食文化などの営みを、「琵琶湖システム」といいます。「琵琶湖システム」は、世界的にも重要なことだと認められ、「世界農業遺産」に認定されました。

世界農業遺産

「その地域ならではの文化、景観、生物多様性などと深く関わり合いながら、人々の暮らしを支えている農林水産業の営み」を認定する制度。

▶食べることで、びわ湖を守る (4-10 環境こだわり農業)

滋賀県の多くの農家さんは、びわ湖の環境や田畑の生き物を守るために、「環境こだわり農業」に取り組んでいます。農薬や化学肥料を半分に減らすことや、田んぼのにごり水をびわ湖へ流さないようにするなど、環境にやさしい方法で作られた農産物は「環境こだわり農産物」といいます。普段からこうしたお米や野菜を選び、食べることで、環境こだわり農業に取り組む農家さんを応援することにもつながります。

このマークが目印！



環境こだわり農産物

■びわ湖で生まれた奇跡の宝石 (4章トピック 真珠養殖業)

びわ湖では、1930年頃からイケチョウガイというびわ湖固有種の貝を使った淡水真珠の養殖が行われてきました。しかし、貝の成長不良などが続き、淡水真珠の生産量は急激に減少してしまいました。最近では、淡水真珠の価値が改めて見直され、滋賀県と関係者が協力しながらその復興に努めています。

出来上がった真珠は、ピンクやオレンジなど様々な色があり、形も丸だけではなく、卵形や棒状などいろいろあります。どれひとつとして同じものはない個性的な真珠は、びわ湖が育む奇跡の宝石です。



真珠母貝の飼育管理



淡水真珠